

## 茨城県におけるヒメトビウンカの薬剤感受性

### [要約]

県西および県南地域から採集したヒメトビウンカは、平成5年に茨城県で採集された個体群と比較し、エトフェンプロックスに対して感受性は同等であるが、イミダクロプリドに対して感受性の低下傾向が認められる。

茨城県農業総合センター農業研究所

令和2年度

成果  
区分

技術情報

### 1. 背景・ねらい

イネ縞葉枯病は県西地域を中心に発生の多い状況が続いており、発生地域は拡大傾向にある。本病の対策として、媒介虫であるヒメトビウンカを対象とした薬剤防除は有効な手段であるが、薬剤の選択肢が限られていることから、基幹薬剤に対する感受性の低下が懸念されている。

そこで、県西および県南地域から採集したヒメトビウンカについて、基幹薬剤であり、感受性に関する知見があるイミダクロプリドとエトフェンプロックスに対する感受性を明らかにする。

### 2. 成果の内容・特徴

1) ヒメトビウンカ各個体群のイミダクロプリドに対する半数致死薬量（以下、LD<sub>50</sub>値）は0.35～6.32 $\mu$ g/gであり、平成5年に茨城県で採集された個体群の0.26 $\mu$ g/gと比較して採集年や地点によっては10倍以上高い値であり、感受性の低下傾向が認められる（図1）。

2) ヒメトビウンカ各個体群のエトフェンプロックスに対するLD<sub>50</sub>値は2.43～4.94 $\mu$ g/gで、平成5年に茨城県で採集された個体群の1.7 $\mu$ g/gと同等である（図2）。

### 3. 成果の活用面・留意点

1) 本成果は、平成30年～令和2年の5月に県西および県南地域の小麦圃場で採集したヒメトビウンカを対象に行った薬剤感受性検定の結果である。検定は「イネウンカ類の薬剤感受性検定マニュアル」（農研機構九州沖縄農業研究センター、2017）に準じて微量局所施用法を実施した。

2) 育苗箱施用剤の使用にあたって、前作においてイミダクロプリドなどのIRACコード4Aの薬剤の効果の低下が疑われた場合は、新規系統育苗箱施用剤を含めた別コードの薬剤を選択する。

3) イミダクロプリドを有効成分とする薬剤はアドマイヤーCR箱粒剤等、エトフェンプロックスを有効成分とする薬剤はトレボン乳剤等がある。これらの農薬は、令和3年3月1日現在、水稻のヒメトビウンカに対して登録のある薬剤である。

#### 4. 具体的データ

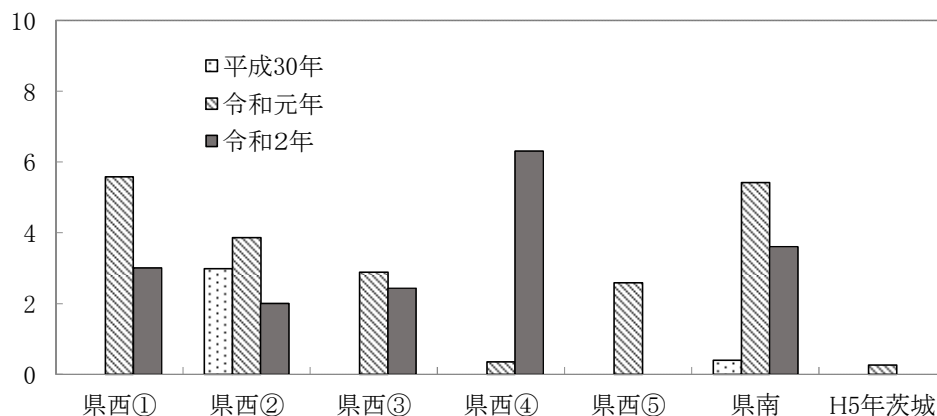


図1 ヒメトビウンカ各個体群のイミダクロプリドに対するLD<sub>50</sub>値(平成30~令和2年)

注1)「H5年茨城」は Shozo ENDO et al. (2000) Journal of Pesticide Science 25:395-397. の数値による

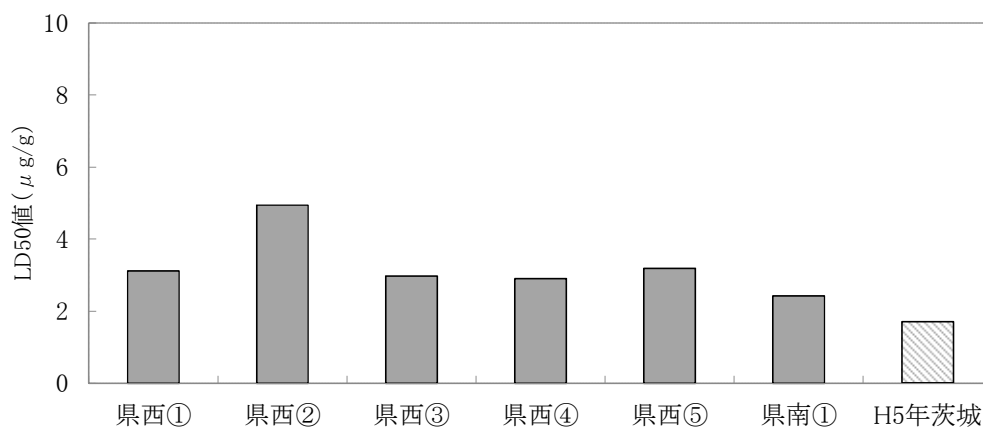


図2 ヒメトビウンカ各個体群のエトフェンプロックスに対するLD<sub>50</sub>値(令和元年)

注)「H5年茨城」は Shozo ENDO et al. (2000) Journal of Pesticide Science 25:395-397. の数値による

#### 5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

重要病害虫防除対策強化事業・平成30年度~令和2年度・病虫研究室、農業総合センター病害虫防除部